「夢」を叶えるまちに！
狭山の活力、「ものづくり」への挑戦

出席者
大星電機株式会社 代表取締役社長　若松　泰誼さん
株式会社アダムジャパン 代表取締役社長　関根　沙織さん
株式会社フィアロコーポレーション 代表取締役社長　岩﨑　晃彦さん

世界に挑む！狭山のオンリーワン企業

市長　明けましておめでとうございます。平成28年の新春をご家族おそろいでお迎えのことと思います。

狭山市も活力あるまちを目指して28年のスタートを切りましたが、商工業の活性化なしには狭山の活力は語れません。狭山市は2つの工業団地を抱える県内有数の工業都市で、市内には、卓越した技術力を持っている企業が数多くあります。

関根 沙織さん

本日は、その中から3社の経営者の皆さんにお集まりいただきました。皆さんの「ものづくり」に対する情熱や、それらを支える「ひとづくり」の考え方、そして狭山市に事業所を構える企業の経営者として、「まちづくり」に対する思いなどをお聞かせいただければと思います。

まずは、皆さんの企業の紹介も含めて自己紹介をお願いします。

若松　1972年の創業以来、制御系設備とメカトロニクス分野のシステム開発から製造までを行っています。制御系設備では自動車製造ラインのロボットを制御するシステムの構築など、日本の産業界における各種の制御システムの設計から製造までを行っています。

岩﨑 晃彦さん

私は宮崎県出身ですが、主な取引先が本田技研工業㈱でしたので、創業時から狭山市に住んで43年になります。縁あって20年ほど前から、宇宙に関わる仕事も増え、今ではわが社の部品を使った人工衛星が宇宙を飛んでいます。

関根　入間市生まれですが、3歳から狭山市に住んでいます。「狭山愛」に溢(あふ)れているので、いつも狭山市のために尽くしたいと考えています。

私の会社は、ビリヤードのキューティックを作っています。創業は1970年。職人技というか「ものづくり」の精神が受け継がれ、世界に顧客を抱えている会社に成長しました。大量生産ではない、お客様の注文に応じたオンリーワンの製品が提供できる企業を目指しています。

岩﨑　狭山市で生まれました。私の会社は、1939年に江戸川区で創業しましたが、当時は産業用機械の木型を職人が「のみ」や「かんな」で削って作っていました。

私は3代目で、現在は、主に自動車やオートバイの車体のデザインや設計開発を行っています。新車デザインの平面のイメージを立体化したり、大きいモデルをゼロから作りあげたり、新しいアイデアを形にしていく仕事です。東京モーターショーに出品するような車や試作車作りのサポートもしています。

自分たちの作る「もの」へのこだわり…そしてプライドを持つことが大切

市長　皆さん、狭山市との関わりも長く、しかも素晴らしい技術力をお持ちですね。これまでの歩んできた道を振り返ってみて、「ものづくり」への情熱やプライド、経営者として心がけてきたことはどんなことでしょうか。

若松　私たちは、「ものづくり」を通じて社会に貢献する企業であり続けたいと思っています。日本の企業は「ものづくり人材」で支えられています。だから、常にチャレンジをもって進化していかなければいけないと思っているんですよ。そこに信頼というものができます。たった一つの不良品で一気に信用が失われてしまいますからね。

小谷野狭山市長

市長　その品質の高さを維持する情熱が、宇宙に関わる仕事へのステップとなったのでしょうね

若松　そうですね。ワイヤーハーネス事業もわが社の大事な仕事です。これは計器と機械をつなぐ血管みたいなものと思ってください。「この技術を活(い)かして宇宙ハーネスをわが社でできないか」と思い、厳しい品質管理を承知で取り組みましたが、難しく多くの壁にぶつかりました。試作品をマニュアル通りに作っても合格には至らず、「どうしてだろう」と考えたところに「ハンダ付け」の問題が分かったのです。答えが出るまで多くの時間がかかりました。やはり基礎的で地道な作業の積み重ねが大切なのです。

関根　私の会社のキューティックは、細かい作業を皆で分担して行い、一つの製品をチームで完成させます。多くの手間と時間を要するため、製品の価格は決して安くはありません。だからこそ手にした方に長く愛用してもらえるように真心を込めています。古いパーツを極力保存するようにして、クレーム対応はもちろん、有償での修理やカスタマイズも受けているのはその思いからです。それが会社や製品の信頼に繋がっている取組みだと信じています。

若松 泰誼さん

ただ、私自身は「ものづくり」の技術を持っていませんし、ビリヤードも上手(うま)くありません。私の役割は社員が働きやすい環境を整え、社員の技術と知識をこの会社でずっと活かせるようにすることです。そのためにも社内の風通しを良くし、私が気づかないことでも、社員が意見を述べられる雰囲気を作っています。問題を社員全員で考えてクリアすることが技術の向上を支えています。

岩﨑　かつての製造業は、職人の技術があって、個人で完結させることで仕事が回っていました。現在は依頼主から注文を受けた複数の仕事を、同時進行で動かすことが求められているので、チームでの開発が欠かせません。

今や設備や仕事の流れは、どこの会社も一定のレベルに達しているので、外見上で製品の差別化を図ることが難しくなっています。依頼主の目も厳しいので、感動を与えるくらい圧倒的な品質レベルのものを提供しなければ、期待する評価を得ることができません。

そこで一つの仕事に社内のチームで取り組ませることで、依頼主との間に垣根を越えた、もう一つのチーム力を育てる。そのことが、より技術力の高い「ものづくり」を実現させています。

市長　皆さんそれぞれに信念やこだわりがおありですね。

狭山市の大きなブランドである「狭山茶」は、今までに3回大きな危機を経験しています。風評被害とか、そのたびに「何とかしよう」と、皆で技術力をあげて乗り切ってきたそうなんです。「皆で」という横のつながりがうまくいくと前に向く大きな力が生まれますね。

岩﨑　お互いが、言いにくいことでも言い合えるような関係になることは、良い「ものづくり」にもつながりますね。日本人は昔から「ものづくり」への情熱というか、執念のような「思い」を持っていると感じていますよ。